金的略奪の島

玉子王子　著

一章　ギャル、飯井（めしい）ヒロミ

　砂浜。

　海は広く、島などは全く見えない。

　焚火の周りに座り込む男女。

　といっても、男は島村一人。

「ほらっ、さっさと食べ物集めておかないから……俺言っただろ！？　食べ物がないと死ぬんだぞ、お前らわかってるのかよ！」

　女たちは、華奢な者もいれば島村より体格もいい者もいる。

　二〇人ほどの女たちに、嵩にかかって叫ぶ。

「とにかく、明日からはもう、食べ物集めだ！　わかったな！？」

「わかったよ島ちゃん」

　知り合いではない。

　ギャル風の軽い女。島に一緒に流れ着き、名乗った段階でもう「島ちゃん」だった。

　女たちに対してもそうか、といえばそうでもない。

　男に対しては不用意な感じもするほど距離を詰めるが、女同士だと微妙なものもあるのか。

　まあ、島村にとってはどうでも良かった。

　島村たちは、大体二〇歳ほどから三〇ぐらいまで。

　島村自身は二五歳。

　元ヤンキーで、パシリギリギリ程度のパッとしない立場だった。地元に残り、親のコネで農協に転がり込み、まあ安泰の人生を送りつつあった。

　矢先に、遭難。

　船がひっくり返り、無人島に漂着だ。

　まあまだ無人島かどうか、島村たちは知らないが。

　数日、一緒に流れ着いた保存食で食いつないだ。

　すぐ助けも来るだろうし、無理して危ない目にあってもつまらないと。

　しかし数日しても助けは来ず、食べ物が乏しくなり始めた。

　というわけで、島村ブチ切れの段である。

　女たちは不満顔だが、何も言わない。

　――何なのよ島ちゃん、あんたが「めんどくせえ、どうせ助けすぐ来るだろ」って言ったから、念のための食糧集めもしなかったのに、なに？　島ちゃんの頭の中では「自分は食べ物集めを主張していた」っていう歴史認識確立してんの？　それだけならまあまだしも、ブチ切れるとかなんなん？　軽く「言ってたもんね」って思うだけならまだしも、切れるってことはマジで心の底から信じ込んで

るってこと？　こわっ。

ギャル風の小柄な女性、飯井ヒロミ。

煌びやかな艶のある長髪に付け爪、太もも剥き出しの短いスカートという見るからにギャル風ファッションなので気が強そうに見えるが、特にそうでもない。

愛想がいいのは、率先して近づいて仲良くなり、身を守ろうという面も大きい感じ。

黙っている。

他の女性らも大体島村の掌返しに嫌なものを感じつつも、指摘して揉めるほどの事でもないのでとりあえず黙っていた。

嫌な雰囲気で、ばらけて寝る。

南洋のジャングルっぽい島であり、植生は豊か。刃物などはないが、枝を手で折って一様屋根にしてシェルターを作ることはすでに初日にできた。

それぞれそこで寝て、食べ物探しを始める。

案外難しい。

木の実や果物、貝、それに魚などを採る。

初めこそ助け合いで分け合っていたが、徐々に採れたり採れなかったり、運不運やもともとこういうサバイバルに向いているかどうかで差が出始める。

それでも一様全員が満足できるだけ採れるならいいが、採れない。

たくさん採ったのにみんなで分けたら大した量がなくなる、という事を何度か経験した採れる側の

人間が徐々に集団と距離を取り始め、やがて皆が島中にばらける感じになった。

　といっても、完全にバラバラになるほど広い島でもないし、そこまでやるのは何かあって行方不明にでもなった場合の救助の可能性がゼロになるので危ないと皆わかっていた。

　バラバラでは「いない」と認識してもらえず、捜索もないだろう。

　というわけでつかず離れず。

　遭難から一月が経つ頃には、採れるものと採れない者の差はかなり決定的になる。

　特に多く採れたのは島村だった。

　男であるから、二三人のアスリート系の者を除けば体力はずば抜けているし、同じく地元に残っているヤンキーのリーダーが一時期キャンプにこって、付き合わされた経験がプラスになっていた。

　魚の捕り方が分かったのが大きかった。

　魚の干物を作れるほどの余裕もできてくる。

　空きビンをレンズにして日光を集めて火をつけ、捌いた魚を木の枝に吊るして煙で燻す。

　あまり効率もよくないが、とりあえずそんなものと思い作っていく。

　一方で、かなりまずいのが一番小柄で、遊ぶのは好きだがアウトドアという意味ではない感じの、ヒロミだった。

　自分ではあまり採れず、仕方ないので島民の間を回り、その日多く採れた人間から分けてもらうという無理のある行動をとっていた。

　いや、自分で採取もするのだが、しつつ、分けてもらいに回る。

　初めこそ多くの者が助けてくれるが、基本生活が楽なものはあまりいない、徐々に煙たがられるようになる。

　特に、島村をはじめ多く採れるタイプは多く与える形になり、たかられている気がしてきて他の者より邪見に扱うようになる。

　フラフラと森をさまよう。特に何も採れない。

　石に腰掛け、体を曲げて膝に肘を突いて頬杖。付け爪はもう無くなっていた、無人島でサバイバルにはただただ邪魔なだけだ。

　――いよいよまずいわ。こうなったら、あんな「元ヤンキーだ」とか自分で言いだすオラついたやつ嫌だけど、体で食べ物分けてもらうしかない。嫌だなあ。それに、最後の手段だよ。そんなことしてるってほかの子に知られたら、いい顔されるわけないし。

　今はギリギリ「善意」で食べ物のやり取りが行われている。

　しかし一番持っている島村に対して、誰かが「体」で食べ物をもらいだせば、それがスタンダードになりかねない。

　――バランスを崩した人間としてにらまれるのは嫌だけど、でももうヨロヨロだし。

　背に腹は代えられない。

　食べ物を探しつつ、島村を探す。

　運よく出会う。

「あ？　なんだよ、食いもんならねーぞ。余分はな」

　舌打ちせんばかりに肩を怒らせ、目を逸らす。

　その態度だけでも生きる気力が萎えるヒロミ。そんな態度を取られながらも、相手に近づいていかねばならない立場にいることも苦痛だ。踵を返して走り去りたいが、食べ物の代わりに差し出せるものはもう体しかなく、それに価値を見出すのはこの島では島村だけなのだ。

「島ちゃん……じゃなくて、島村さん。悪いんだけど、また食べ物分けてもらえない？」

「またか！？　盗人と何が違うんだよ！」

唇を噛むヒロミ。

――そんなこという？　こいつにとったら、人傷付けることは「強い」ことになるのかなあ。そんな感じの言動だしね……

「わかってる。だからお礼させてもらうよ」

「礼って、何もないだろ」

「あるよ……島村さん、別にこの島の誰かと付き合ったりしてないよね？」

「あ、なるほど……へへ、女だな。女は得だぜ」

頬を引きつらせながらも、何とか笑うヒロミ。

「うん、だから」

「わかった、食いものぐらいやるよ。俺もケチな男じゃねえ。それじゃ、そっちの陰で」

頷く。

――早速か……溜まってんだね。そりゃ溜まるか。

木の陰というか、少し密集して生えているだけだが、とにかくまあ目立たない場所に移動する。

ズボンのジッパーを下げる。

「さ、とりあえずしゃぶれよ」

「うん」

膝をつき、見る。

目を見張る。

――え、なにこれ。小指じゃん。すっごい皮かむってるし。

普段なら、スルーする。短小包茎など、指摘して得をすることなどありえないのだ。

まして、つい笑ってしまったりしたら相当面倒なことになりかねない。

よくわかっている、経験豊富なヒロミだ。

しかし、今は少し飢餓状態にあり、頭が鈍っていた。

「ぷっ」

つい噴き出してしまう。久しぶりの女にありつけると蕩け切った顔をしていた島村。その顔が一瞬で引きつる。

「あっ？」

「あ、いや。きゃっ！」

「なに笑ってやがる！」

バン、と平手打ち。横倒しになるヒロミ。腐葉土だから倒れたこと自体は痛くない。

しかし頬の痛みと頭に響く衝撃で目の前が真っ白になる。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい！」

「なに笑ったか言ってみろよ！」

顔を真っ赤にする島村。

ズボンの前。出したものが引っ込んでいる。入れたわけではない。

ただ、引っ張り出さないと出ない程度の大きさだった。

小指のようなそれを見て、つい笑ってしまったヒロミ。

今は血の気が引いている。

――ま、まずい。チ〇ポが小さいからって笑っちゃうなんて。かわいそうだし、それに怒らせちゃう。でも、普段のあのオラついた態度でこれって……いや、でも思い出してみたら、こういう態度がデカい奴ほどチン〇ンは小さかったなあ……補うために粗暴になるのかな？

「ごめんなさい、するから、許して」

「けっ、仕方ねえな。でも、食べ物は無しだぞ」

「え？　何それ！？」

「お詫びにヤらせんだよ。当たり前だろうが」

「嘘でしょ……今、ヨロヨロなんだよ。食べ物貰えないと死んじゃうよ」

「知るかよ、死ね」

ズボンを下す。

肉玉は普通。

「……」

涙を浮かべるヒロミ。殴られ、半ば無理やり犯されようとしている。そしてそれへの見返りは無しなのだという。

空腹と屈辱、殴られた頬の苦痛に気が遠くなる。

その姿を見下ろし、島村はニヤニヤするだけだ。

――へへへ、やっぱ女なんて殴って言うこと聞かせりゃいいんだよ。気分いいぜ。

足を振り、パンツを脱ぎ捨てる。

足を開く。上着を脱ぎ始める。

シャツをめくり上げ、頭を通そうとする。

完全に無防備。

プルン、と揺れる肉玉。

倒れた体勢から、どうにか上体を起こしたヒロミの顔の前にそれがある。

「……」

――これって……男の人の弱点なんだよね。急所。

唾をのむ。

ギャルで、その辺蹴り上げていそうなヒロミだが、案外そんなことはなかった。

むしろ男たちとうまく付き合い、喧嘩することもなかった。

それでも、知識として急所のことは知っている。

男と喧嘩することもあった友人から多少聞いている。

玉が潰れても、薬で治せるから平気だと。

コンビニで買える、ナノメカが入った薬。

実は、この島にもある。

ひっくり返った船から、医療品は流れ着いているのだ。

その中の一つが、どんな怪我でも治るナノ薬、一瓶五〇粒入りの奴が段ボール箱一杯。

それが何箱もある。

戦争できるじゃん、と笑ったものだ。

慣れない探索など、皆が平気でやっている理由の一つはそれである。多少、というか仮に片腕が吹っ飛んだりしてもすぐに治せる。

ならある程度無理もできるというわけだ。

「へへ、久しぶりだな。中学からやってる俺だ、こんなに禁欲したのは久しぶりだぜ」

汗でべたついているのか、シャツをめくり上げ、頭を隠した状態でもたつく。

揺れる肉玉。

絶対急所。

肉玉を凝視するヒロミ。

――こいつ、ひどい奴だよ。女殴って……キ〇タマ蹴ってやろうか……でも、仕返しされたら。いや、あは、大丈夫じゃん、私こんなもんついてないし。潰れちゃっても治せるんだし……

ゆっくり立ち上がる。

しかし、あまりゆっくりもしていられない。

シャツを脱ぐ、無防備な時間が終わってしまう。

歩み寄る。

「ん、なんだ？」

見えないが、振動などでなんとなく相手が動いているのはわかる。

だが、細かい動きは見えない。

足を振りかぶるヒロミ。

サッカーのように。

そして、不思議と叫んでいた。

「キーン！」

「ほふっ！」

つま先を思い切り蹴り込む。グニュ、と肉玉が変形する。

ぎょっ、と顔をゆがめるヒロミ。

――うわ、変な感触！　男の人の体に、こんな柔らかいところがあるなんてちょっと……いや、まあエッチの時に触りまくってるから、こんな感じかなあ、とは思わないでも無かったけど。とにかく、もう一発！　動かなくなるまで……

「ふぐうううううう」

蹴られてつま先立ち。そしてその場に膝をつき、頭から腐葉土に突っ込む。

「え？」

二回目の蹴りを放つ暇もない。

目を剥くヒロミ。

「ちょ、うっそ……え？　冗談？」

腰を引いた形で倒れ、尻を空に突き上げる形だ。

「ぶっ、なにこの恰好。タマタマ守って倒れてるの？」

横に回り、尻を蹴る。どさりと倒れる。

「ほふうううう」

「ぎゃははは、なにこれ？　タマタマ痛すぎて動けないってこと？　マジ？」

眉を八の字にして半笑いのヒロミ。

ピクリとも動かない島村。

脱ぎかけのシャツを戻して顔をみる。白目を剥き、泡を吹いていた。

「うわ！　完全に気絶してる！　うっそでしょ……キ〇タマ一蹴りでコレ？　っていうか、もしかしておキ〇タマ潰れてたりして……」

足を開かせる。

腫れ上がった肉袋をつかみ、指をめり込ませて玉を探る。

「ふむふむ、キンキン二個ともしっかりあるわね。でも気絶と。あは、ほんとに急所なのね。弱。急所よわー。男よわー」

笑いつつ、脱ぎ捨てられたズボンからベルトを取り、腕を後ろ手に縛る。

そして頬を叩き、目を覚まさせる。

「あっ、なに……あ、ぐうううううう！　た、たまあああ！」

「ぎゃはは！　キ〇タマ痛かった？」

「い、いてえ……ぶっ殺すうううううううふぐうううう」

座ったままだが、腰を引こうとする。グネグネとそれを動かす。

噴き出すヒロミ。その妙な動きが金的のダメージから来ていると思うと笑ってしまう。

「あは、何それ。腰振って。タマタマの痛み少しはましになるの？」

腰に手をやり、文字通り見下す。

「わかんないわー、そんなもん付いてないからね。よわーい、キ〇タマ！　付いてないもんね！」

膝を開き、腰を突き出す。スカートである、見上げればパンツが見える。

唾をのむ島村。

――く、クッソ、クソ女が……見りゃわかる通り、こいつは玉も竿もねえ。だから蹴り返す意味もねえ。やるなら、レ〇プ……レ〇プしかない。当然だよな、玉思いっきり蹴ってくる女だ、やられて当然。

「んー、んふふ、おキ〇タマはないよ、そこには。蹴ってもむーだ、急所がないからね。女の子のお股には、ブチュっと潰れる急所がない。そりゃここも頑丈じゃないけど、ぶぶっ」

へこっ、と腰を引くヒロミ。

「はほっ！　玉がっ！」

「なっ」

「っていう、ぶっざまな醜態晒すお急所キンキンぶら下げてる部分よりは万倍強いっすよ」

「くううう、ふ、ふざけやがって」

「あら、強気ね島ちゃーん」

「な、はふっ」

ぺし、と爪先で軽く股間を蹴る。

「こーんな弱点、ぶ・ら・さ・げ・て」

目を剥き、何とか股間を守ろうと足を締めて唇を噛む男を見下ろすヒロミ。

蹴った足にほとんど力を入れていなかったことが、同じ急所を持たない「女」である事への優越感を掻き立てる。

「く、むうううううう」

「あは、マジで今の蹴りでそのダメージじゃないよね。あ、さっきの蹴りのダメージがあるからそうなんだ。うんうん、そうだよね。今のでそれじゃ急所ったって弱すぎだもんね」

「お、お前、ふざけんなよ。あとでやってやるからよ」

ドキリとするヒロミ。

――後で……今は縛ってるけど、殺すわけにもいかないんだから、後で仕返しもできるよね。でも、男のくせに、女脅すとか何なの？　っていうかホント、この一月、こいつのいいところってほとんど見たことない。こんなんで彼女持ちとか意味わかんない。まあこんな元ヤンキーの女なんてクソドブスなんだろうけど。いやいや、彼女さんに当ることないよね。

「へー」

「へへへ、それが嫌ならさっさと」

「勇気あるねえ、島ちゃん」

――ここは脅しとかないと危ないよ、うん、そうしよう。あんまりそういうの好きじゃないけど。

しゃがむ、閉じられた股。挟み込まれてぱっと見女のようになった股間の隙間に手を押し込む。

「あ、やめ」

「おらっ！　女舐めてると潰しちまうぞ、キ〇タマ！　キ〇タマ！　キ〇タマ潰すぞ、おい！　コーガン、潰す！　一個残してくれるとか思うなよ！　二個ともだ、二個ともぶっ潰す、二つ！　玉を二つとも潰す！　身動き取れない男の、キ〇タマ！　潰すなんて簡単だぞ！　潰す、玉！　こっちは女！　女なの！　タマタマがないの！　だから玉潰しに遠慮なし！　仕返しされないし！　むしろキ〇タマ二個とも潰したほうが仕返しにレ〇プもされない！　いいことづくめ！　だから玉、潰す！　そのお股についてるボール、二個ともぺしゃん！　グチョ！　ブチュ！　つ・ぶ・す！」

「ひいいいいいやめて、やめてください！　すいませんでした！」

　股に押し込まれた女の細い手、それが肉玉を掴むに至っては、元ヤンキーもクソもない。汗を噴出させ、許しを請うしかない。

　チラ、と股間を見るヒロミ。もともと小さい一物がさらに萎みあがっているのがわかる。

　――ビビってるわ、完全に。うふ、男ってここ見られたら本心ばれて大変ね。っていうかこれ握られたらそれどころじゃないけど。

　多少強く圧迫している。

　が、潰す気はない。

　――治るったって、軽々しく潰せないよね。

「初めから素直になればいいのよ」

「すいませんでした！」

「それじゃ、お詫びに食べ物貰うけど、いいよね？」

「え、それは……タダでってことですか？　あああああああっ！」

「お詫びだっつってんでしょ！　このままキ〇タマ抜いて餌集め用の去勢豚にしてやろうか！？」

「許して、キ〇タマぶら下げた分際ですいませんでした！　そこを女性様に思いきり握られると男として終わってしまうのでどうかお許しくださいいいい！　たま、タマタマだけは許して！」

「ったく、今回だけよ？　今後今まで通りのチ〇コに見合わないデカい態度取ったら**ガチ去勢**だからね？」

「は、はいい」

　――クソが、舐めやがって！　絶対犯す！　あ、でもこの女はちょっと……怖いから別の女にうまい事理由つけてやっちゃおう。

「それじゃ、食べ物貰うからね」

「は、はい、どうぞお持ちください……」

　大体、お互い食べ物を置いている場所はわかっている。

　まだ盗む人間はいないが、このまま食料の安定供給ができないと時間の問題かもしれない。

　ベルトの拘束はしばらく暴れていれば外れるだろう。

　だからフルチンで島村を放置し、彼の食べ物置き場に向かう。

　普通はその日集めたもの程度しかないが、燻製にした魚が何匹か置かれていた。

「うわ、すごい。クソみたいな奴だけど、サバイバル能力はあるんだなあ」

　多少悩むが、どうせ恨まれることは変わらないだろうと全部持っていくヒロミ。

　持っていきつつ、たかが魚数匹のために何をやっているのかとどっと疲れを感じる。

体験版終わり

この後、島村は無理やり犯そうとして玉潰しを食らったり、しつこく食べ物とセックスの交換を求めて態度の悪さでことごとく失敗、金潰しを食らいます。

さらに、女性たちが協力して貯め始めた食べ物を盗んで逃げ、捕まって寄ってたかって金責めリンチを食らいます。

続きは製品版でお楽しみください。